

真面目に、楽しく、着実に。 地域活動58年。

広島県福山市 福山市西部生活学校





山陽新幹線の福山駅で在来線に乗り換え、山陽本線に乗り10分。ここに今回の取材先近くの松永駅がある。この地域は江戸時代、福山藩の家臣であった本庄重政が、赤穂藩で学んだ最新の塩田築造技術で、松永塩田という広大な塩田を築造したことで有名な場所。のちに西廻り航路の北前船により、松永の塩の販路が拡大し、その品質の良さが評価は高まっていった。そして、塩を運んで空になった北前船に北陸の木材が積まれ、それを材料にして下駄産業が栄える。昭和30年には全国一の下駄の産地になっていた。どちらも現在では廃れてしまったが、塩によって栄えたこの地域で、半世紀以上に渡って地域活動が続ける、福山市西部生活学校の取り組みを取材した。

昭和42年に福山市西部生活学校は、食品の安全に焦点を当て、食品添加物、食品表示などの問題を中心に活動をはじめた。その後は、省エネ・省資源などの環境問題、医療問題や子ども、高齢者などの生活の問題まで活動の幅を広げてきた。長年の取り組みは様々なところから評価を受け、平成9年には、市民の健康と福祉の増加に貢献したことが認められ、福山市長賞を受賞。平成23年には、様々な活動を通じてまちづくりに貢献したことが認められ、福山市善行市民表彰を受賞。平成24年には、地域で環境、食などの多方面で活動していることが認められ、日本財団社会ボランティア賞を受賞した。

そんな福山市西部生活学校の活動を知るために、地域の



「福祉を高める会」と協力して行われた「今津子ども食堂」を取材。7月23日(水)と8月5日(火)に行われたイベントの、8月5日の回を訪れた。

活動日当日の朝9時。生活学校のメンバーが続々と今津交流館に集まってきた。子ども食堂を開催してみようと思ったきっかけについて、福山市西部生活学校の代表をしている岡田照子さんに伺うと、4年前から行っていたフー ドドライブがあったという。そこで、食の支援の重要性を知った岡田さんたちは、より地域に近づいた取り組みをしよう、子ども食堂の開催を決めた。ただ、単独では子どもたちへの呼びかけなどは難しいため、今津交流館などの力を借りることで開催にこぎつけた。

今津交流館は、1983年に今津小学校が移転したため、使われなくなった校舎を公民館として活用し、その後、全面改修の後、現在の形になっている。小学校として長く地域の拠点になっていたこともあり、現在も子どもから高齢者まで多くの方々に利用され、地域市民の大切な居場所になっている。そんな拠点で開催される子ども食堂。この日のメニューは牛丼とスープ。生活学校と福祉を高める会の皆さんは、勝手知ったる今津交流館2階の実習室で、どんな作業を進めていく。

その頃、1階では今津まちづくり推進委員会・福祉を高める会・今津交流館主催の水彩画教室が行われ、地域の子どもたちが参加していた。水彩画講師の太田琴さんは、兵



庫県出身で尾道市立大学芸術文化学部を卒業されてからも
福山で活動している。この教室は、今津交流館のスタッフ
の方と知り合ったことがきっかけで、4年前から始まった。
この地域で芸術活動が続けていく中で、「自分が住んでいる
街のことを好きになるという感覚はここが初めてだった」
と太田さん。そんな先生に教えられ、楽しみながら作って
いる子どもたちの作品は、どれも素敵なものばかりだった。
美味しそうな香りがしてきたので2階へ行くと、料理が
完成していた。水彩画教室を終えた子どもたちも続々と
やってきて、席に着く。地域の子どもから高齢者まで、た
くさんの方々が来ていたこともあり、予定だった50人分を
上回る、72人分の牛丼とスープが提供された。

学校からのチラシを見て、子どもと一緒に来ていたお母
さんに感想を聞くと、「子どもが普段食べない野菜を食べて
いた。友達がいって、地域の人までご飯を食べるのが良い。
おばあちゃんたちも優しくて」と話してくれた。

半世紀以上もこの地域で活動し、食品の問題から環境問
題、子ども支援、高齢者支援など地域の幅広い課題に向き
合ってきた福山市西部生活学校。現在、広島県生活学校連
絡協議会会長で福山市西部生活学校の前代表でもある植村
二三子さんは、この生活学校について次のように話してく
れた。「時代にあった地域の諸問題に取り組み、安全安心の
住み良い町づくりを目指して、地域の皆様のご協力をいた
だきながら、地域と共に歩んでいって欲しい」。